大阪府教育委員会　令和４年度完了報告書

令和４年度「これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方」に関する調査研究の完了報告書を次のとおり提出します。

１．調査研究概要

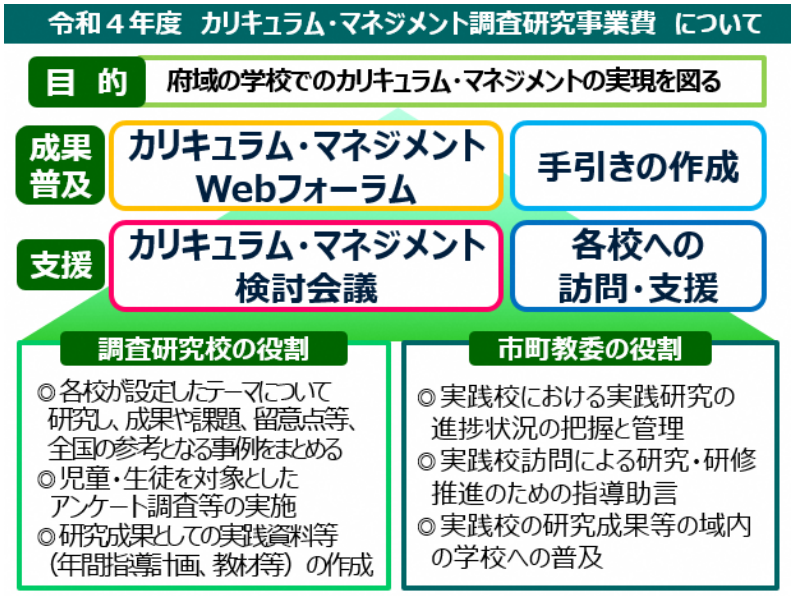
令和元・２年度にかけて、大阪府教育庁が再委託した府内５市町７校（小学校６校、中学校１校）の各実践校で、令和元年度までの自校の取組みから編成した教育課程を元に、実践、評価、改善を行った研究成果についての事例を「大阪府カリキュラム・マネジメントの手引き」としてまとめた。

令和３・４年度は、前回と異なる４市町４校（小学校３校、中学校１校）の実践校を指定し、前述の手引きを参考にしながら各実践校で取組みを進め、以下の２点を中心に調査研究を行った。

（１）先行研究の成果をどのように自校の課題や実態に合った形で落とし込んでいくのか

（２）年間を通してPDCAサイクルを回しながら、どのように各校の課題を解決し、教職員がカリキュラム・マネジメントの意義を理解し、その効果を実感しながら、学校全体で組織的に取組みを進めることができるか

調査研究の目的、成果普及の方法、府教育庁として各市町及び各校への支援、調査研究校や市町教育委員会の役割についての概要は右図の通り



各調査研究校における調査研究を円滑に実施するために、以下のような取組みを実施した。（それぞれの取組みの成果や課題については、**「３．実践地域全体としての調査研究の結果明らかとなった成果や課題と改善方策」**の項目で記載する）

①「カリキュラム・マネジメント検討会議」

目的：大阪府教育庁が調査研究校に対し、本調査研究の円滑な実施のために必要な指導・助言、調整を行う

内容：第１回（８月５日集合開催）

・調査研究校のこれまでの取組みと今後の展望について（各校による発表）

・大阪教育大学　田村知子教授による助言及び講義

第２回（10月24日集合開催）

・カリキュラム・マネジメントの手引き完成に向けての協議

・カリキュラム・マネジメントWebフォーラムに向けての協議

・大阪教育大学　田村知子教授による助言及び講義

②「各調査研究校への訪問・支援」

１学期 → 調査研究校との打合せ（Web実施）

時期：５月17日～18日（１校ずつ実施）

参加者：市町教委担当指導主事等及び調査研究校担当者

内容：年度当初の取組み状況と今後の方向性についての共有

２学期 → 調査研究校訪問（府指導主事２～３名）

時期：＜文部科学省による実地調査＞

９月20日（四條畷市立忍ケ丘小学校）

＜残りの３校は府教育庁による訪問＞

10月28日（田尻町立中学校）、11月14日（富田林市立小金台小学校）

12月２日（忠岡町立東忠岡小学校）

参加者：市町教委担当指導主事等及び調査研究校担当者

内容：Webフォーラム実施や手引き作成に向けた協議及び指導助言

③「カリキュラム・マネジメントWebフォーラム」（１月30日　Zoomにて実施）

目的：令和４年度カリキュラム・マネジメント調査研究事業実施校が、大阪府作成の「カリキュラム・マネジメントの手引き」を参考にして取り組んだ調査研究内容についてWebフォーラム形式で発信することで、教職員がカリキュラム・マネジメントの意義を理解し、その効果を実感しながら、各校の実態に応じて学校全体で組織的に取組みを進め、府域の学校のカリキュラム・マネジメントの実現を図る

内容：「カリキュラム・マネジメントに学校全体で取り組むことの意義」

実践報告及び協議　　四條畷市立忍ケ丘小学校、富田林市立小金台小学校
忠岡町立東忠岡小学校、田尻町立中学校

指導助言及び講義　　大阪教育大学　教授　田村　知子

④「小・中学校 カリキュラム・マネジメント実践研修」（大阪府教育センター実施）

目的：カリキュラム・マネジメントの意義とその充実に向けた取組みについて理解を深めるとともに、組織的にカリキュラム・マネジメントを推進する力を高める

内容：第１回（６月９日Web実施）

・カリキュラム・マネジメントの意義とその充実に向けた具体的な方法について学ぶ講義及び演習

・今年度の取組みについて構想する演習

第２回（２月17日Web実施）

・自校における今年度のカリキュラム・マネジメントの実践について交流する実践報告及びグループ協議

・次年度への継続的な取組みについて構想する演習

⑤「カリキュラム・マネジメントの手引き」作成

【手引きの構成】

令和元・２年度における手引きの作成にあたっては、カリキュラム・マネジメントについての基礎的な知識の理解を深めることができるページを作成するとともに、各校の研究について、カリキュラム・マネジメントに関わる三つの側面それぞれに対応した取組みごとに章立てし、「児童や学校、地域の実態を把握すること」、「教職員全員で取り組むこと」、「取組みの内容や成果を発信すること」の３つの視点を共通の軸として取りまとめてきた。

また、カリキュラム・マネジメントの実現に向けて読者の課題がどこにあり、どのページから読み進めるとよいかを図で示した「カリキュラム・マネジメント　Yes／No チャート」や、調査研究校が実践を進めるにあたって、苦労したことや実感したことについて、Q&A 形式で質問に答えた「Q&A インデックス」を作成し、他校でも取組みを進めてみたくなるような工夫をした。

令和元・２年度作成の手引きの構成は次表のとおり。

第１章　カリキュラム・マネジメントを知ろう
○カリキュラム・マネジメント　Yes／No チャート ○“カリキュラム・マネジメント”って何だろう？ ○カリキュラム・マネジメントの実現に向けた年間スケジュール例 ○カリキュラム・マネジメント Q&A インデックス
第２章　カリキュラム・マネジメントの実現に向けた実践事例とその工夫について
カリキュラム・マネジメントの３つの側面を通して、教育活動の質の向上を図ろう (1)教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていく事例 (2)教育課程の実施状況を評価してその改善を図る事例（PDCA サイクルの構築） (3)教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制の確保とともにその改善を図る事例
第３章　カリキュラム・マネジメントのための参考資料集

第２章で紹介した調査研究校の実践事例の中で実際に活用したワークシート等を参考資料として第３章にまとめ、他校でも活用できるようにした。本手引きは、全編ＰＤＦデータとして作成し、大阪府のホームページ上に公開している。他の学校の教職員がタブレット端末等を使って、「いつでも、どこでも参考・活用できる手引き」として使用できることをねらいとした。

◇　◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

令和３・４年度の手引きは、前述の手引きの“増補版”という位置付けで作成している。章立ては上表のまま構成し、前回同様 PDF データで公開した。

「第１章　カリキュラム・マネジメントを知ろう」には、学校の動きだけではなく、各学校がカリキュラム・マネジメントを推進できるようにするために、市町村教育委員会の指導主事が学校へどのように支援や指導助言を行ったのかを特集したページも追加し、学校、教育委員会、地域の連携について示した。また、大阪教育大学の田村知子教授のご講義を参考に、「カリマネあるある」というページを作成した。これは、「カリキュラム・マネジメント」を進めたいけれども、どこから始めればよいのかわからないと困っている学校や先生方に、参考になるのではないかと考えている。

第２章では、令和３・４年度の調査研究校４校の取組みを、それぞれのテーマに合わせて前回の手引き同様の構成で作成した。その中で出てくる各種資料等については、第３章として紹介し、大阪府ホームページに追加で掲載した。

教職員がカリキュラム・マネジメントの意義を理解し、その効果を実感しながら、各校の実態に応じて学校全体で組織的に取組みを進めることができるように、今後も、府教育センター実施の小・中学校カリキュラム・マネジメント実践研修などを通して、実践校の取組み事例や手引きの内容を広めていきたい。

（実践地域における年間実施スケジュール）

月	取組内容
４月	
５月	調査研究校の決定（４校） 調査研究校・担当指導主事との打合せ（Web 実施）（府）（5/17・18）
６月	カリキュラム・マネジメント実践研修（府）（6/9）
７月	
８月	第１回カリキュラム・マネジメント検討会議（8/5）
９月	文部科学省による実地調査（9/20 四條畷市）
10 月	第２回カリキュラム・マネジメント検討会議（10/24） 実践校訪問（府）（10/28 田尻町）
11 月	実践校訪問（府）（11/14 富田林市）
12 月	実践校訪問（府）（12/2 忠岡町）
１月	大阪府カリキュラム・マネジメント Web フォーラム（1/30）
２月	カリキュラム・マネジメント実践研修（府）（2/17） 今年度の研究についての成果等の検証
３月	カリキュラム・マネジメントの手引き（増補版）の公開

各校の取組みの現状把握

１学期末までの取組み検証

第１回検討会議を受けて
取組みの検証及び改善

R3・R4 の２年間の
取組みをまとめ
府域に Web に公開

２．調査研究の内容

①富田林市立小金台小学校

（１）　研究テーマ

☑　Ａ 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究

☐　Ｂ 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

☐　Ｃ 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

小中一貫校としての９年間を見通し、
めざす子ども像の実現に向けた教育課程編成に係る実践的研究

（２）　調査研究の内容

調査研究校は、隣接する明治池中学校と１小１中の校区構成であり、かねてより相互のつながりが深いことから、本市の学校再編の一貫として、令和４年度より「小中一貫校」として新たなスタートを切ることとなった。

その立ち上げにあたっては、「９年間の新たな教育課程編成」「９年間で育てたい学力像の構築」「生き方を追究する総合的な学習の時間の再構築」等を進めていく必要がある。これらの取組みを着実に進め、求められる資質・能力を確実に育成していくためには、学校の教育課程全体を見渡し、相互に関連付け、教科等横断的な視点で教育活動の質的向上を図る、組織的・計画的なカリキュラム・マネジメントが不可欠である。

そこで、令和４年度は、以下の５点を重点としてさらなる研究を進めていく。

①国語科を核とする言語能力の育成

・これまでの国語科の研究の総括として、作成した「つけたい力」の構造表の中の「つたえあう力」の育成を重点と位置づける。その上で、国語科で培った言語能力を各教科等で生かすと共に、各教科等で学習したことを踏まえて国語科で言語活動を展開する等、国語科と各教科等の関連を図りながら言語能力の育成を図る。

②新カリキュラム「未来科」の実施・確立

・作成した９年間のカリキュラムを基に学習活動に取り組む中で、「つけたい力」の構造表を意識し、児童生徒の発達段階に応じた単元配列や系統性が確保されているか、学習内容・活動が適切であるかどうか等について検証を行う。それによって、「未来科」の柱である「未来を切り拓く力」の育成を常に意識し、ＰＤＣＡによりカリキュラムそのものの改善を図る。

③４・３・２制の構築に向けた取組み

・小・中学校の９年間を、前期（１～４年）・中期（５～７年）・後期（８・９年）に分ける学年区分の導入をめざし、カリキュラム作成と各区分に適した教育内容・活動の検討を進める。また、期ごとの児童生徒のリーダー性育成をめざした学習活動・学校行事を開発する。

④ＰＤＣＡサイクルにおける「Ｃ（評価）」の信頼性向上に向けた取組み

・カリキュラム・マネジメントにおいて、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていく上で、校外の人的資源の活用のあり方について研究を進める。たとえば、小・中学校合同の「学園協議会」等において、学校の取組みに対する地域人材の知見を活かすことに取り組む等、より地域に根ざした学校・学園づくりを進める。

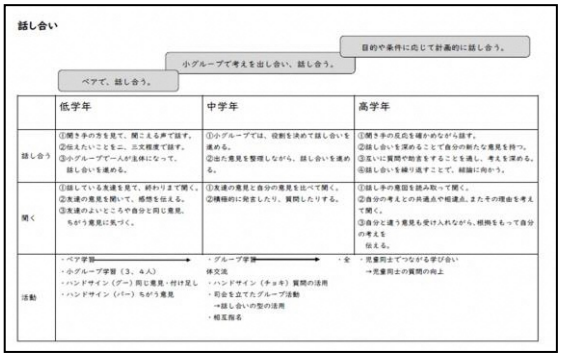
⑤学校を挙げてのカリキュラム・マネジメントの推進と、授業改善・授業力向上に向けた校内研究会や公開研究発表会の実施

・学年会及びブロック学年会における授業研究、教材研究の実施
・事前検討会等を活用した研究授業の充実
・公開研究発表会の実施による研究成果の発信
・外部講師の招聘による研究の深化

（３）　調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

①国語科を核とする言語能力の育成

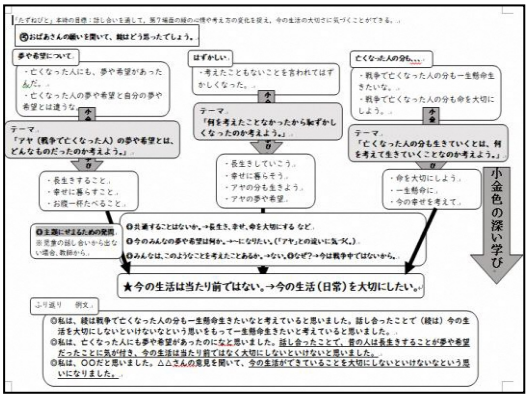
令和３年度より、小・中学校でめざす子ども像から導いた「つけたい力の構造図」に基づきながら、これまでより研究を進めてきた国語科を中核として、他教科と関連させながら言語能力の育成をテーマに授業研究を進めてきた。



研究授業においては、討議会で見出された成果と課題を丁寧に整理し、次の授業改善につなげられるよう、PDCAサイクルを意識しながら取組みを進めた。また、普段の授業でもPDCAサイクルを回すには、授業の成果と課題を見取る必要があることを共通認識し、「ふりかえり」の活動を授業の見取りの場面として設定した。

そこで、本時の「めあて」に対する「ふりかえり」でどのような学びの変容・更新・新たな気付き・疑問が書かれているのかを検証することで日々の授業改善につなげた。

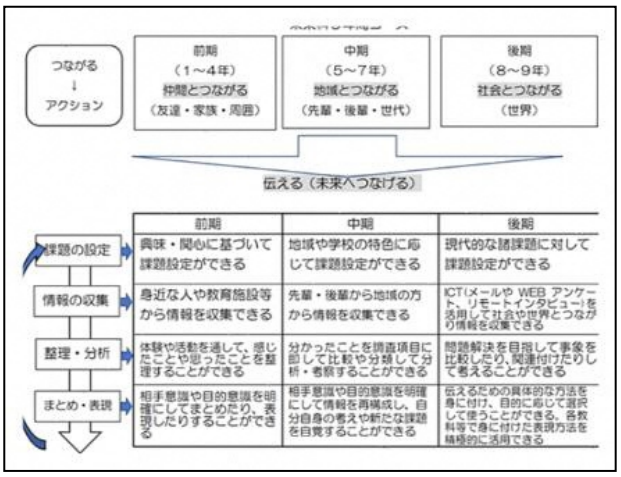
「ふりかえり」の活動を見取りとして授業改善を進める中、子どもたちが見通しを持ちながら学習でき、教員のねらいに対応した学びの「ふりかえり」ができる「めあて」の提示方法や、自分の考えや集団の考えを発展させることができる話し合い活動の在り方等が新たな課題として見えてきた。そこで、１時間の授業を構造化し、可視化して分析する必要性から、新しい指導案の型として「コネクトマップ」を発案した。



「コネクトマップ」とは、ゴールから逆算して授業を設計し、子どもの思考と学習過程に沿った授業展開を可視化するためのツールである。「コネクトマップ」では、予想される本時の「ふりかえり」や、到達したい子どもの姿が明記されており、授業の評価基準がより明確になっている。このことにより、授業者はもとより、授業参観者も子どもたち一人一人の到達度と、授業評価を効果的に行うことができるようになった。

②新カリキュラム「未来科」の実施・確立

小・中学校で子どもたちにつけたい力を共有し、めざす子ども像を具現化するためには、生きて働く学力を育む必要があり、その活用の中核を担う教科として、生活科と総合的な学習の時間を再編成した「未来科」のカリキュラム開発を開始した。



実態調査としてアンケートを実施した結果、「自分には良い所があると思う」という設問に対する肯定回答率が７割に留まり、自己肯定感の低さが明らかになった。「未来科」では、このような子どもたちの課題解決も踏まえ、小・中学校が一体となった異学年交流を幅広く取り入れ、ピアサポートを通して、自分は必要な人間なのだという自己有用感の向上につなげることもねらいとした。

次いで、未来科のグランドデザインを考案し、めざすべきゴールを「未来を切り拓く力の育成」と設定した。また、学園として９年間を見通した各期別のテーマを設定し、前期は「仲間とつながる」、中期を「地域とつな

がる」、後期を「社会とつながる」とし、学年が進むにつれて対象の視点を広げられるよう構成した。さらに、「未来科」でつけたい力が可視化できるよう、構造図を作成し、そこから各学年の年間計画を作成した。

〈新カリキュラム「未来科」の実際〉

（ｉ）小中合同集会

・小中一貫校開校後初めての学園生全員による全校集会を実施した。集会では、小学校の児童会と中学校の生徒会が協働して司会進行を務め、学年毎にこれからどんな学園にしていきたいか抱負を発表した。その後、全員が入り混じってレクリエーションを実施する中で、徐々にこれまでなじみのなかった顔と顔がつながっていった。また、中学生が小学校低学年の児童に優しく接する場面もあちらこちらで見られ、この集会を通して、子どもたちは「今まで別々だった小学校と中学校が本当に１つの学校になったんだ」という実感を持つことができた。

（ⅱ）平和学習の交流

・９年生が長崎への修学旅行で実施した平和学習の中で、折り鶴を捧げる場面があり、その折り鶴作りに小学校で平和学習に取り組んでいる５・６年生も協力した。修学旅行後には、９年生の「修学旅行　・平和学習報告会」に５・６年生も参加し、９年生の生徒会が修学旅行で学習してきたことをわかりやすく説明する中、５・６年生は９年生と協働したこともあり、平和の大切さについて、実感を伴いながら学びを深めることができた。

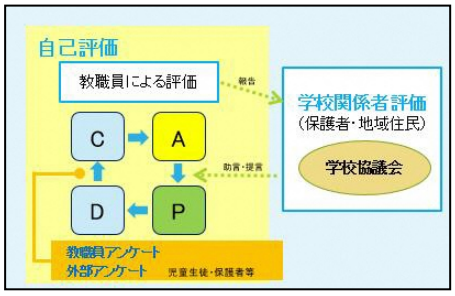
未来科については、今後、その探究的な活動をとおして身につけたい力の見取りを工夫しながら確立していく必要がある。とりわけ、未来科を通して育みたい資質・能力である問題発見・解決能力や情報活用能力、また、他教科と関連させながら高めていきたい言語能力についてはその評価を可視化していきたい。現段階では、これらの資質・能力を評価する手立ての一つとして、大阪府が実施しているすくすくウオッチの「わくわく問題」の活用を検討している。また、「わくわく問題」の問題自体も探究的な活動が取り上げられており、今後の未来科の取組みにおけるヒントとなると捉えている。今後は「わくわく問題」の結果を精査し、活用方法を工夫することで、未来科のカリキュラム・マネジメントに活かしていきたい。

③４・３・２制の構築に向けた取組み

小中一貫校「彩和学園」の開校に伴い、抜本的な学園システムの改善プランを作成した。新しい学園システムでは、まず、児童生徒の発達段階を踏まえた９年間の区切りを見直し、３区分編成とし、各期を「前期」（１～４年）・「中期」（５～７年）・「後期」（８～９年）とする。そこでは、各区分に適した教育内容・活動の検討を進める他、各期の児童生徒のリーダー性の育成をめざした学習活動・学校行事を開発する。特に、現在、多くの中学校で課題となっている、小学校での指導方法や生活環境の違いによる不安、いわゆる「中１ギャップ」による不登校等にも対応できるよう、中期の充実にはいち早く取り組む必要がある。

④ＰＤＣＡサイクルにおける「Ｃ（評価）」の信頼性向上に向けた取組み】

今年度より新しく学園としてスタートし、これまでの取組みに係る効果検証をアンケートで実施している。対象を、教職員・保護者・児童生徒とし、授業に関することや学校生活に関すること、学園運営や小中連携に関することなどを多様な観点で見取ることで現状把握に努めている。また、このアンケート結果については現状値として次年度以降の各取組の目標設定に活用していく。



さらに、外部評価を充実させるために、小・中学校の既存の学校協議会を基盤として、新たに「学園協議会」を設置し、学識経験者や地域人材等の知見を生かして教育課程の実施状況を客観的に評価しその改善を図る体制を整えた。現時点では小・中学校それぞれの学校協議会も

併設しているが、今後の一体化に向け、今年度の実施状況をふまえて改善を図っていく方向である。「学園協議会」の設置により、学園の様々な取組みに外部人材の知見を活かすだけでなく、学園運営における最も大きなＰＤＣＡサイクルの「Ｃ」の信頼性向上を図った。さらに、学園の運営に地域の声を積極的に生かすことで地域に根ざし、地域とともにある学園づくりを進めている。

⑤学校を挙げてのカリキュラム・マネジメントの推進と、授業改善・授業力向上に向けた校内研究会や公開研究発表会の実施

これまでの「国語科を核とする言語能力の育成」に関する研究成果を見取る場として、12月に全学年による公開研究授業を実施した。ここでは、富田林市の教職員のみならず広く大阪府域からも参加を募り、より多くの教職員から本研究に対する評価をいただくことができた。特に「コネクトマップ」の活用や話し合い活動の系統性について好評の声をいただいたと共に、各教員の「めあて」の提示方法のちがいや「ふりかえり」への評価基準の違い、曖昧さについての課題も指摘していただくことができた。本公開授業では、客観的に授業研究の成果を検証することができたことに加え、学識経験者からは学校全体で回すPDCAサイクルについて指導助言していただき、より多面的・多角的に本研究を分析することができた。

（４）実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
５月	●府教委学校訪問（WEB）
６月	○校内研究授業
７月	○１学期成果検証
８月	●第１回カリキュラム・マネジメント検討会議
９月	○外部講師による校内研修
10 月	●第２回カリキュラム・マネジメント検討会議
11 月	●府教育庁学校訪問
12 月	○研究発表（全学年公開授業）（外部講師による指導助言） ○２学期成果検証
１月	○先進校視察（姫路市立豊富小中学校） ●カリキュラム・マネジメント Web フォーラム
２月	○カリキュラム・マネジメントの手引き作成完了
３月	○年度末成果検証

○：校内での取組み、●：大阪府との取組み

②四條畷市立忍ケ丘小学校

（１）　研究テーマ

☐　Ａ 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究

☑　Ｂ 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

☐　Ｃ 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

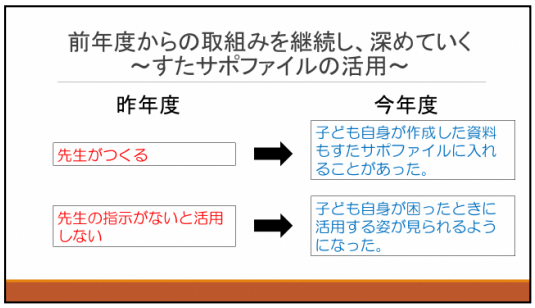
研究テーマ　　自分の思いや考えをわかりやすく伝え合う児童の育成
～各教科で汎用的に活用できる書く力の向上をめざして～
めざす子ども像　「すすんで学び　自分や友だちを大切にする子」

（２）　調査研究の内容

国語科で身に付けた「書く力」を他教科にどのように生かしていくのかに焦点を絞り、令和３年度より調査研究を開始した。

令和３年度は「他教科で汎用的に書く力」を育成すべく、めざす子ども像を見つめなおすことで、学校全体の教育課程の見直しを図り、教科横断的な視点から再整理することができ、すべての教科で、児童が学んだことを大切に保管できるファイル「すたサポファイル」を活用することができた。

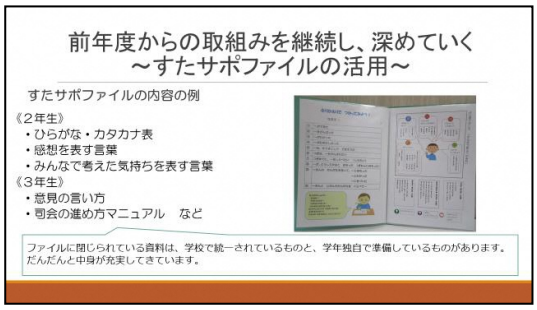
令和４年度は、子どもたちが「すたサポファイル」を自らで活用できることをめざして、取組みを継続し、深めることで、教員や子どもたちの姿が大きく変容した。（図①）



図①

教員は、内容の充実に向け試行錯誤し、各学年の子どもたちが活用しやすいように内容の充実を図り、学年によっては、児童自身が作成したものもファイルに入れることもできた。

「すたサポファイル」を参考にすることで、作文やふりかえりなどを書くときに考え込む児童が少なくなる姿が見られるなど、取組みの成果が現れた。（図②）



図②

（３）　調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

全教科を通して書くことに対して抵抗感がなくなった児童が増えた。書くことがわからない場合もすたサポファイルを参考にしながら書こうとする姿が見られるようになった。

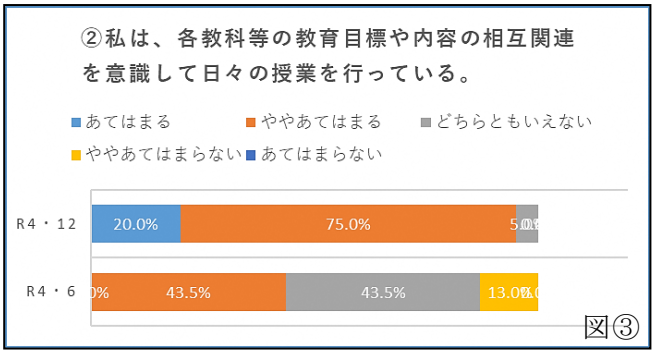
作文指導をする際に、書き出しの工夫の仕方を指導したり、すぐに原稿用紙に書くのではなく、構成メモに整理する時間を取り入れたりするようにした。

また、カリキュラム・マネジメントを意識した授業づくりを校内全体で実践することにより、教職員も他教科とのつながりを意識した授業づくりができるようになった。子どもたちは他教科でも、国語科で学習した「書くこと」を意識しながら、文章を書く姿が見られるようになった。

教職員の意識の変容を見取る指標として、令和３・４年度ともに、カリキュラム・マネジメントについての教職員アンケートを年間２回実施した。

令和４年度１学期のアンケートでは、教職員の大幅な入れ替えもあり、全体的に肯定的回答の割合が減少したが、１学期と夏休みの研修に加え、単元配列表やスタサポファイルの活用を通して取組みが教職員全体に浸透していき、２学期のアンケートではほぼすべて

の項目で肯定的回答の割合が増加した。令和４年度は特に、「私は、各教科等の教育目標や内容の相互関連を意識して日々の授業を行っている。」が大きく上昇した。（43.5%→95.0%：図③）



図③

２年間、国語科をベースとしたカリキュラム・マネジメントの取組みを行う中で、前述したような教職員及び児童の変容した姿が見て取れた。学習指導要領総則に「カリキュラム・マネジメントに努めるものとする」と記載されているが、本校は記載されているから取り組んだのではなく、組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図る必要があったから取組みを進めた。

今後も、「やらなければいけない」から「やる」のではなく、「やる必要がある」から「やる」ことを常に念頭に置き、「型」にあてはまらない、児童や地域の実態に即した本校独自のカリキュラム・マネジメントを進めていきたい。

学習の時間における探究過程を強く意識した指導が組織的に行えるよう、今の取組みをブラッシュアップしていく。

（４）実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
５月	●府教委学校訪問（WEB） 〇「しかけシート」（実践報告書）を活用した実践 〇「すたサポファイル」の作成
６月	〇カリキュラム・マネジメント研修会 ～学習指導要領総則からみた児童の実態の考察～（指導主事から指導助言） 〇児童アンケート、教職員アンケート（前期）の実施
７月	〇校内研修　指導案作成
８月	●第１回カリキュラム・マネジメント検討会議 〇１学期の振り返り
９月	●国による実施調査（兼　府教育庁学校訪問） 〇「しかけシート」（実践報告書）を活用した実践
10 月	〇「しかけシート」（実践報告書）を活用した実践 ●第２回カリキュラム・マネジメント検討会議
11 月	〇研究授業・校内研究「国語科と総合的な学習の時間の教科横断的な取組み実践」 〇「カリキュラム・マネジメント」研修会（外部講師のご講演）
12 月	〇単元配列表の見直し 〇児童アンケート、教職員アンケート（後期）の実施
１月	〇研究授業・校内研究「国語科と生活科、図画工作科の教科横断的な取組み実践」 ●カリキュラム・マネジメント Web フォーラム
２月	〇研究授業・校内研究「国語科と生活科、図画工作科の教科横断的な取組み実践」 〇「カリキュラム・マネジメント」研修会（外部講師のご講演） 〇アンケート結果からのアセスメント
３月	〇総括

〇：校内での取組み、●：大阪府との取組み

③忠岡町立東忠岡小学校

（１）　研究テーマ

☐　A　学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究

☑　B　学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
研究テーマ『根拠をもって自分の考えを表現できる児童の育成』

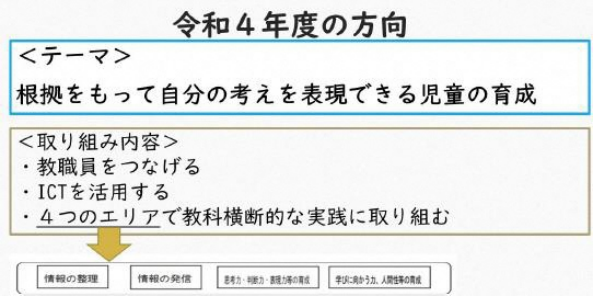
☐　C　現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

「根拠をもって、自分の考えを自分の言葉で表現できる力」を育むため、カリキュラム・マネジメントに学校全体で取り組む

（２）　調査研究の内容

「根拠をもって、自分の考えを自分の言葉で表現できる力」を育むため、カリキュラム・マネジメントに学校全体で取り組んだ。令和３年度の取組み「ICTを活用して、各学年・各部・各教科等の取組みをつなげる」を、さらにアップデートするために次の２つの課題に正対した。

・つなげる取組みを日々の授業にいかに反映させるか
・PDCAサイクルのCAに係る時間をいかに効果的に作ることができるか



令和４年度取組みの方向性とねらい

【方向性】

①各学年の取組みの共有化・見える化
②縦割り活動レインボータイムの設定
③校内研究授業と事後検討会の活性化
④児童・家庭・地域とつながるための情報発信
⑤ICTの活用による個別最適な学び・協働的な学びの実践研究

【ねらい】

①教職員同士のつながりを深める
②児童同士のつながりを深め、全教職員があらゆる児童とつながりを持つ
③全教職員が自分事として研究をとらえる
④学校の重点を意図的に啓発する情報発信を行い、家庭での取組みをつなげる
⑤ICT機器が得意なこと・不得意なことを見分ける

（３）　調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

【成果】

・教員・児童・家庭・地域がそれぞれつながる場面が増加した

①教員同士のつながり…レインボータイムの計画、公開授業への全員参加、事後検討会での班活動、まなびレポートでの交流

②児童同士のつながり…レインボータイムでの縦割り班活動（クリーン大作戦、なわとび、音楽会等）

ペアやグループでの意見交流、班活動の活発化

③家庭・地域とのつながり…家庭学習チャレンジ週間、まなびレポート、授業参観時の掲示物、学校だよりでの情報発信

レインボークリーン大作戦

・課題に正対した指導の方向性の一致

①各学年のまなびプランを計画・実行

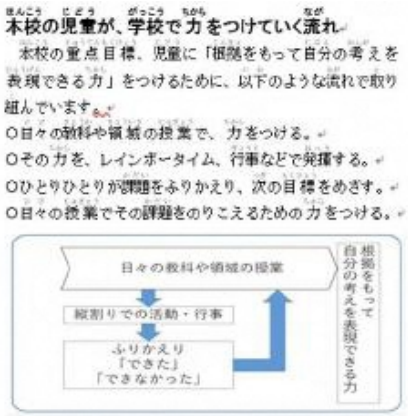
（PDCAサイクルで速やかに改善）

②研究授業後の事後検討会で方向性の見直し

・表現できる場の増加

①授業内での表現形態の工夫

②レインボータイム内での交流タイム



本校の児童が、学校で力をつけていく流れ

本校の重点目標、児童に「根拠をもって自分の考えを表現できる力」をつけるために、以下のような流れで取り組んでいます。

○日々の教科や領域の授業で、力をつける。

○その力を、レインボータイム、行事などで発揮する。

○ひとりひとりが課題をふりかえり、次の目標をめざす。

○日々の授業でその課題をのりこえるための力をつける。

【課題と改善策】

・児童が安心して表現できる集団作りが達成できなかった

①自己肯定感、自己有用感を育む工夫

②授業において、互いに認め合い、励まし合い、支え合える集団づくり

③自己決定の場を提供する授業づくりの継続

④安全・安心な「居場所づくり」に配慮した授業

以上４点を来年度以降の重点目標として掲げ、実践を進める

（４）実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
５月	●府教委学校訪問（WEB） 〇学年授業改善検討会　まなびプラン・まなびレポート開始（Ⅰ期）
６月	〇学年授業改善検討会
７月	〇学年授業改善検討会　アンケート① 〇夏季職員研修（１学期ふり返り他）
８月	●第１回カリキュラム・マネジメント検討会議 〇学年授業改善検討会（Ⅱ期）

９月	○学年授業改善検討会　○研究授業（６年）
10 月	●第２回カリキュラム・マネジメント検討会議 ○学年授業改善検討会　アンケート② ○研究授業（３年、２年）
11 月	○学年授業改善検討会（Ⅲ期）　○研究授業（４年）
12 月	●府教育庁学校訪問 ○学年授業改善検討会　　○研究授業（５年）　アンケート③
１月	○学年授業改善検討会（Ⅳ期）　研究授業（１年） ●カリキュラム・マネジメント Web フォーラム
２月	○学年授業改善検討会　　研修のまとめ　アンケート④
３月	○年度末ふり返り　次年度年間計画作成・検討

○：校内での取組み、●：大阪府との取組み

④田尻町立中学校

（１）　研究テーマ

☐　Ａ 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究

☐　Ｂ 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
研究テーマ『根拠をもって自分の考えを表現できる児童の育成』

☑　Ｃ 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

社会に開かれた教育課程の実践から、現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

（２）　調査研究の内容

つけたい力を「逆境力（壁にぶつかったとき、自分の力や他者と協力しながらのりこえられる力）」と「社会的実践力（義務教育を終え、社会に出たときに生きて働く力）」とし、より主体的に取り組めるよう、地域の方々と協働しながら地域全体を学習の場とする。そして、地域社会で起きている課題を見つめなおし、「田尻町のために私たちは何ができるか」「他者と協力して何ができるか」「学校で何ができるか」という観点で、役場・地域・企業と協働しながらお互いにアイデアを交換し合い、課題解決に向けて活動する。校内においては、校務分掌を見直し、カリキュラム・マネジメント担当教員を配置し、担当教員を中心としたカリキュラム・マネジメント検討会議を定期的に開催し、職員全体でつけたい力を共有することで教科横断的な視点から授業改善を図る。

学習の流れ

１．課題をつかむ
SDGs のグローバルな目標から田尻町の課題に焦点化し、子どもたちが感じる田尻町の課題を各グループが設定

２．アイデアを企画・提案する
各グループで課題解決に適したグループを選定し、「１．自分たちに今、何ができるか」、「２．学校全体で何ができるか」、「３．地域・役場と連携・協力して何ができるか」という視点から解決策を連携する方々に提案

３．実現に向けて行動する
解決策を提案して終わるのではなく、各グループが実現に向けて行動

４．学習例（課題設定→企画・提案→実現）

・田尻川の環境悪化→町全体で清掃イベントを開催することで、川がきれいになるだけでなく、町全体の団結力も高めたい→SDGs 田尻川クリーン作戦を開催
・田尻町の孤食・個食→大人から子どもまでみんなで食事を囲みながら団らんできる場を提供したい→「みんな食堂」を開催
・田尻町の認知不足→田尻町の魅力を発信できるお弁当を販売し、かつ雇用も生み出したい→SDGs 弁当販売
・田尻町にインスタ映えするところがない→田尻町にインスタ映えする場所を作り、拡散されることで田尻町をもっと知ってもらいたい→顔出しパネルを作成し、イベントなどで設置
・まちづくりをもっと盛り上げたい→田尻町オリジナルのものを発信したい→駅前にオリジナルラッピングポストを設置

（３）　調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

（○：成果、●：課題→改善方策）

○　総合的な学習の時間を核としたカリキュラム・マネジメントを推進し、めざす子ども像やつけたい力を各教科担当教員で共有することで、これまで以上にそれぞれの教科の見方・考え方を働かせるような授業改善が進んだ。

○　「社会に開かれた教育課程」の理念の実現に向け、学校と役場・地域がつながり、協働しながら課題解決に取り組むことができるなど、教育の質の向上を図ることができた。

○　学校がめざす子ども像やつけたい力を地域と共有することで、学校理解が進んだ。

○　探究的な学習を重点的に進めることで、総合的な学習の時間のみならず他教科においても生徒たちの主体性が向上し、学力向上にもつながった。

●　カリキュラム・マネジメントはすべての教職員が参画して行うものという意識が高いとは言い切れない。

→　管理職や主担当者のみならず、カリキュラム・マネジメントの成果を共有しながら、全教職員でその必要性を理解できるようにする。また、教科等の縦割りや学年を越えて、学校全体で取り組んでいくことができるよう、学校の組織や経営の見直しを図る。

（４）実践校における年間実施スケジュール

月	取組み内容
５月	●府教委学校訪問（WEB）
６月	★中学校引き継ぎ会（成果と課題を共有）
７月	★第１回ミーティング 〇研修会の開催　外部講師による講義 テーマ：「地域をよりよくするための探求学習」 〇学期末アンケートの実施
８月	●第１回カリキュラム・マネジメント検討会議 〇アンケート結果の分析・検証
９月	〇カリキュラム・マネジメント校内検討会議（中間報告及び今後の方向性確認）
10 月	●第２回カリキュラム・マネジメント検討会議 ★第２回ミーティング（●府教育庁学校訪問）
11 月	★アイデア実現のための取組み（11 月～３月）
12 月	〇学期末アンケートの実施 〇アンケート結果の分析・検証
１月	●カリキュラム・マネジメント Web フォーラム
２月	●カリキュラム・マネジメントの手引き作成完了
３月	〇年度末アンケートの実施

〇：校内での取組み、★：中学生の取組み、●：大阪府との取組み

３．実践地域全体としての調査研究の結果明らかとなった成果や課題と改善方策

（〇：成果　●：課題）

【成果】（〇数字は「１．調査研究概要」の各取組みと対応）

①カリキュラム・マネジメント検討会議

〇第１回では、手引きをまとめるにあたっての方向性を共有できた（第２回までの間に、手引きの「Why,How,Change」について作成しておくことを宿題とした）。また、１学期を終えた時点での各調査研究校の取組みについて、情報共有することができた。大阪教育大学の田村知子教授に、他の先進的な事例についてご講義いただいた。

〇第２回では、９月に実施された文部科学省による実地調査（四條畷市立忍ケ丘小学校）の様子と、協議の内容等について共有した。また、各調査研究校が第１回以降の取組みについて、手引きの「Why,How,Change」を軸に発表し、お互いの取組みの進捗を共有できた。

（実地調査にてご助言いただいた内容より）

・「ミドルとカリマネ」…中堅の先生にこそ、カリマネ研修はとても必要だといえる。ミドルの先生方がカリマネを理解していないと広まらない。今日の授業が「カリマネを体現している」ということを共有することは、管理職や担当者と他の先生方の意識をつなぐよいモデルとなる。

　その意義を、「今日の３名の先生方が、どういう思いで授業を作っていったのか」という視点で、校内研修等で共有し、<u>学校の先生の“参画意識”を高め、“自分ごと”として経営活動に関われているんだと実感できるとよい</u>。

・Q.（担当の教員より）教員が動いても効果を感じにくい面…例えば、子どもに具体的に変容が出てきにくいところ、時間がかかるのでどのように捉え、取組みを続けていけばよいか。

⇒A. 時間はかかるかもしれないが、長く続けていって、教員や子どもの変化の兆しをフィードバックしていくことが大切。一人ひとりの子どもに現れた兆しみたいなものを、学校のみんなが喜べるような雰囲気も必要。学校の中で管理職や担当者が俯瞰的に見てフィードバックすることも大切だが、<u>指導主事が学校を外からみて話をする、価値づけするということもあわせてやっていくとよい</u>。

②各調査研究校への訪問・支援を通して

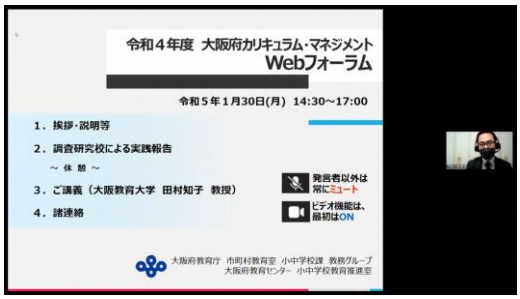
〇１学期の調査研究校との打合せでは、５月中旬に各調査研究校の取組みについて、めざすべき方向性を共有できた。

〇２学期は、先述の文部科学省による実地調査及び10月下旬～12月上旬頃に各調査研究校を、府指導主事２～３名で訪問した。８月と10月の２回のカリキュラム・マネジメント検討会議を通して、調査研究校４校の取組みを把握していたものの、実際に調査研究校の教職員や子どもの様子を見ることにより、着実にカリキュラム・マネジメントの推進に向けて取り組みが進んでいることを確認できた。

〇Webフォーラム実施や手引き作成に向けた協議及び指導助言を行い、各校の特色ある取組みをどのように取り上げ、府域の教職員に向けて発信するかについて確認できた。

③カリキュラム・マネジメントWebフォーラム（Zoom開催）

令和４年１月30日（月）14:30～17:00
実践報告及び協議　　調査研究校４校
指導助言及び講義　　大阪教育大学
田村知子　教授
参加者数：リアルタイム開催　28アカウント
オンデマンド開催　203名



○Webフォーラム形式で発信することにより、教職員がカリキュラム・マネジメントの意義を理解し、その効果を実感することができた。令和３年度のWebフォーラムで、田村教授のご講義の時間が短くなってしまった反省を活かし、前半の調査研究校の発表、後半は田村教授のご講義を中心にして、講義内で前半に発表された各調査研究校の取組みと結びつけてお話しいただいたところ、参加者から概ね好評を得た。
アンケート結果の概要は、次頁の通り。

参加者アンケートより：
○「本フォーラムで学んだことを、今後のカリキュラム・マネジメントの推進に活かすことができると思いますか」⇒<u>肯定的回答　100%</u>
○「本フォーラムの内容を、市町村や学校内で広めようと思いますか」
⇒<u>肯定的回答　96.6%</u>
●「（本フォーラムの内容を受けて）自身の学校が作成した諸計画のつながりが有機的なものになっていると思いますか」⇒<u>肯定的回答　69.0%</u>
「あまり有機的なつながりになっていない（29.3%）」「まったく有機的になっていない（1.7%）」と回答した参加者の割合を合わせると約３割となり、今後の課題と感じた。

（アンケート　コメント欄より）
○以下のコメントの通り、多くの参加者が、今年度の調査研究校の発表や講義から、自校でもカリキュラム・マネジメントを推進していきたいという実感を持つことができるWebフォーラムとなった。
・各校の実践報告がカリマネのそれぞれの側面を意識したものになっていて、本校の取組みも方向性として間違っていないのだという認識を得ることができました。今回の研修の中で、「できていることに目を向けることが次へのエネルギーになる」という言葉に改めて感じるところがありました。カリマネが新たな取組みでなく、従前のものを見直し、捉え直し、組み直すそんなところから学校全体の取り組みに生かしていけるよう考えるきっかけとなりました。
・４校の具体的な取組みを紹介していただき、また、それらを田村教授のご講義内容につなげて説明してもらえたので、非常に分かりやすかったです。大きな学びとなりました。本町においても、まだまだ課題がたくさんありますが、本日の内容を、各校の実践に繋げていきたいと思いました。
・単元配列表について、「計画表」でありながら実践の記録簿でもある、ということから、年度当初に力を入れて作成するのではなく、年度末の今に記録として作成することに力を入れる方がより実践的なものとできると感じました。
・今まではカリマネのために「しなければならない」ということに縛られていて、うまくいってなかったように思います。子どもたちのために何ができるかということを大切に、また、教職員どうしが繋がることが大切だとよくわかりました。

④小・中学校カリキュラム・マネジメント実践研修（大阪府教育センター主催）

○第１回（６月９日Web実施）では、研修参加者がカリキュラム・マネジメントの実現に向けて具体的なイメージを持つため、カリキュラム・マネジメントの意義や３つの側面について講義を行い、講義の内容を踏まえて自校における取組みについて構想する演習を実施した。研修参加者は、「カリキュラム・マネジメントの手引き」に掲載された取組みとカリキュラム・マネジメント３つの側面を結び付けて確認することができ、カリキュラム・マネジメントに対する理解が深まった。
○第２回（２月17日Web実施）では、研修参加者によるグループ協議や、次年度への継続的な取組みについて構想する演習を実施した。第１回の内容を受けて、研修参加者が各校で実践した成果と課題を持ち寄り、次年度からのカリキュラム・マネジメントの実践について、具体的に考えることができた。
○本実践研修では、今年度の調査研究校２校の担当者も参加しており、府教育庁による取組みと、府教育センターの研修の内容を連動させることができ、担当者のカリキュラム・マネジメントに対する理解をより深めることができた。

（振り返りレポートより）
・児童の実態とめざす子ども像の共有を確実にしたうえで、子どもに付けさせたい資質・能力を考え、カリキュラムを組んでいくことが大切であると思いました。また、全教職員で向かう目標を明確にし、子どもたちに一貫した教育を行うことがつけさせたい資質・能力の獲得への近道であると思いました。
・カリキュラム・マネジメントは目的ではなく手段である。そして、大きな目的というベクトルのもとで、既存の学校文化を見直してみる。特に、縦のつながりと横のつながりの網目を目的に基づいて、どのように編んでいくかという視点が大切であると思いました。

⑤カリキュラム・マネジメントの手引き

令和２年度末には「手引き」、令和３年度末には「R3研究のまとめ」についてそれぞれ大阪府のHP上にPDFデータをアップロードし、府域での活用を促した。府教育庁主催の各種研修や、府教育センター実施の小・中学校カリキュラム・マネジメント実践研修でも手引きを紹介した。

大阪府公立小・中学校における令和４年度　教育課程編成状況調査より：
府が作成した実践事例集・指導の手引き等の活用状況
「カリキュラム・マネジメントの手引き」

	令和３年度	令和４年度	前年度比
小学校	77.6%（464校/598校中）	**82.5%**（492校/596校中）	**＋4.9%**
中学校	69.8%（199校/285校中）	**76.9%**（219校/285校中）	**＋7.1%**

Webフォーラム参加者アンケートより：
「『カリキュラム・マネジメントの手引き』をすでに活用したor読んだ」（＝認知度）
⇒　**令和３年度**　**66.7%**　→　**令和４年度**　**86.2%**

○昨年度と比べて認知度も高まり、より多くの学校で手引きを教員研修や授業等に活用していることがわかった。引き続き、令和３・４年度の研究についてデータを追加したことなどを発信し、活用を促していきたい。

【課題及び考えられる改善方策】

●Webフォーラムのアンケートで、「（本フォーラムの内容を受けて）自身の学校が作成した諸計画のつながりが有機的なものになっていると思いますか」という問いに対して、「あまり有機的になっていない」と回答した参加者の割合が、29.3％となり、課題を感じている学校が多いことがわかった。

令和３年度のWebフォーラムにおいて、各調査研究校から提出された発表資料で示されていたことと、府教育庁が学校訪問した際にとても良いと感じた取組みや、教職員や児童生徒にとっての成果についてギャップがあり、「当事者（学校）は、自分たちの取組みのよさや成果について過小評価しがちである」という傾向があった。

もしかすると、参加者の中にも、同様に実際にはさまざまな工夫をして、学校の中でPDCAサイクルを回しながら、取り組んだことについて評価をしているものの成果を実感していない、あるいは「当たり前にやっていること」として学校が認識していないことが考えられる。学校内の評価だけにとどまらず、市町村教育委員会や、府教育庁が客観的に学校の取組みについて価値づけしたり、成果として着目することを促したりすることが必要であると考える。

４．参考資料

【必須】

①大阪府「カリキュラム・マネジメントの手引き」

②カリキュラム・マネジメント検討会議の資料

【任意】

①大阪府カリキュラム・マネジメントWebフォーラム資料